

編集後記

今回、本報告集の編集という大任をいただき、原先生をはじめ関係諸氏には多大なご迷惑をおかけしたが、それも終わりに近づき、ひとまずは胸をなでおろしている。個人的には大変勉強になり、シンポジウムで報告の機会をいただいたことと合わせ、この場を借りてまずお礼を申し上げたい。また何分にも拙筆ゆえ、今回のシンポジウムと報告書の編集に際しての雑駁な感想をもって、編集後記に代えることをご寛恕願いたいと思う。

本報告書中の竹野論文が指摘するように、「樺太」は日本の植民地の中でも研究の不活発な地域である。竹野はその理由も指摘しており、それに異議を唱えるつもりはないが、その他に、樺太＝サハリンという地域が日本の植民地という点だけを抽出してもその本質を語り得ない地域であることにも一因があるように思える。サハリンに関する古典的通史というべき **John J. Stephan, Sakhalin. A History, Oxford: Clarendon Press, 1971** の邦訳副題 (J. J. ステファン、安川一夫訳『サハリン：日・中・ソ抗争の歴史』原書房、1973年) にみるように、近世以降のサハリンにおいて (近世以前にウエイトのある中国はともかく) ロシア (ソ連) と日本という二国間での関係性や対立抗争の帰趨は、最も重要な歴史的特質の一つであり、本来であれば日本の植民地である樺太という状況はその時代的連続性の一局面にすぎない。しかしながら、2005年現在において日本の研究者によるサハリンの通史は未だに編まれていないために、日本の歴史研究では時間的連続性をもってサハリンを理解するという視点に欠ける傾向がある。麓、塩出、竹野、池田らの資質や業績がいかに優れたものであるかは今回の報告でも明らかではあるが、日本側のサハリン研究の課題は、これらが断片的な成果として存在するだけで、サハリン (樺太) の歴史的全体像が一向に見いだせないままであるという点にある。

対照的に、ロシア側には M. C. ヴィソコフを中心に編纂された通史が既に存在する。それゆえ、今回の報告でも、紙幅の都合はあるものの、この通史の中で比較的脆弱な分野に焦点を絞って詳述するか、あるいは南北の地域比較などにより角度を変えた論述を試みる形での報告となっている。必然的な結果として、完成した枠組みの中でのマイナーチェンジにとどまってしまう傾向があるような印象を受けた。

日口の対比といえどもう一点、今回のシンポジウムで印象的だったのは、日本側の報告がどちらかと言えば植民地社会の「罪」に目を向けたものであったのに対して、ロシア側の報告では急速なテンポの発展をむしろ「功」として肯定的に論じる傾向が見られたことである。いわゆる開発論に近いそのアプローチは、あるいは現在のサハリン社会を反映した歴史観であるかもしれない。つまり、日本期における「発展」を、石油・天然ガス開発で大きく変容しつつある現在のサハリンに投影しているのではないだろうか。

周知のように、サハリン島は20世紀の大部分を巨大な製紙工場として過ごしてきた。呼び名・住民・社会体制が変わっても、製紙・パルプを基幹とする産業構造に本質的な変化は見られな

かった。だが、20世紀の最後の10年間でこの基幹産業が崩壊し、新たに石油と天然ガスがサハリン経済の新しい牽引者となった。両者は、島内の天然資源を島外へ移(輸)出するという基本的構造と、島外の(巨)大資本がその経営主体になっている点で共通している。極言すれば、天然資源移出型の経済構造が再構築されつつあるのが現在のサハリンであるという視点が成り立つであろう。そして、こうした変容の渦中に身を置くサハリンの研究者たちにとって、日本期の「発展」が好意的に見えるのも、ある意味では当然と言えるかもしれない。

しかしながら、かつての王子製紙がもたらした功罪を歴史的教訓として整理し、それによって現在の経済的「発展」を検証することは、サハリンの健全な成長のために不可欠なプロセスであろうし、新旧の基幹産業の比較検討を通して資源移外型経済の構造的特質を多面的に理解することにも大きな歴史的意味があろう。あくまで一例として換言するなら、王子製紙とサハリン・エナジーを改めて同一の俎上に載せることで、既存のフレームワークとは異なる新しい視座でサハリンの歴史を論じることができるのではないだろうか。いずれにせよ、今後両国の研究者たちが共同で研究を進めていく環境が整えば、より多面的・複眼的・連続的な視点での省察が可能となることは改めて論じるまでもなく、上記は単にその一例にすぎない。つまり、日口の研究者による緊密な連携が、現在をも視野に含めた新しい歴史的枠組みを次代の「通史」として構築することを可能にしていくと思う。

末尾ながら、現在のサハリンではアーリン、テチュエワ、イパチエフ、チェルニコワ、ポタポワといった多くの若手研究者たちが活躍していることに改めて驚きと喜びを覚えたことを付記しておきたい。概して日本の「樺太」研究者は、ともすれば鬼子的な扱いを受ける研究領域で現在も孤軍奮闘を余儀なくされている。そんな中で、宗谷海峡の向こうにも「同志」たちが存在するという事実には、どれほど勇気づけられたかは筆舌に尽くしがたい。と同時に、日本とロシアの両研究者たちがお互いの歴史について率直に語り合える時代が到来しつつあることにも深い感慨を覚えた。本報告集の中で、両国の少壮といえる学究たちが轡を並べたことは、サハリン研究にとっても新しい時代の象徴というべきであり、こうした状況がさらに一層の進捗を見ることこそが肝要であろう。その意味でこの報告集が新しい歴史の一里塚となることを心より願いつつ、これをもって結びの言葉に代えたい。

2005.12.27.

井濶記